

文苑

和歌

庭の花の半さきけるころ俄に熊本にめされければ

十五日の朝門出すとて

朽木菴主人

ことしこそ詠めむものと思ひしをまたちいつる花の下庵

都の邊を過くる時車のうちにてよめる

花みむと思ふ心もあらし山君に仕ふる今日の身なれば

形見の松を見て

ゆかりあれやまたたちかへり裁えたさし形見の松をけふみつるかも

月前柳

蘆

月

三日月を小櫛とかさす佐保姫のみどりのかみや青柳の糸

春雨

窓ちかきをさゝの葉末露見えてふるとしもなく春雨をふる

ふるさともなく力あり

歸雁

聲はかり空にのこして雁かねの雲にさえゆく春の夕くれ

花岡山の花見てよめる

蘭 溪

丈夫のみたを祭れやさくらはなちりし昔の友を思ひて

春雨ふる頃山家の友を訪ひけるに門とさしたりければ、

中熊直喜

雨風にうちとさしたる柴の戸に人くとやなくうくひすの聲

日長籬落無人過惟有蜻蜒蛺蝶飛といふ心を

とふてふのかけものどかに見ゆるかなくる人もなき春の山と

名所落花

武士のこてに匂ひし花の香にむかえを忍ふ志賀の山越

春駒有情

あら駒も心あるらん春の野のすみれの花をふみかてにゆく

つはな

うなる子かつみのこしたる飽田野のつはなと春の薄なりける

新體詩

山窓讀書

うき世をよそのやどなれば、

雲の戸さしもあるものを、

~~~~~  
とひ來る人やたれなると、

あなたをみればかけもなく。